

# 火星

平成二十三年十月号



七曜抄

(七)

山尾玉藻

樹の股の子が秋風を言ひにけり

日向のこゑ日陰のこゑや萩咲ける

百毫寺町秋播きにいそしめる

とんばうの翹伏せなほす風の巖

屋上の虫売りに浮く雲ひとつ  
種こぼすこと堪へゐる吾亦紅  
曼珠沙華手折る真顔でありにけり  
さつきまで子供のをりし曼珠沙華  
赫々と崖はあり穴まどひ  
酔ひの座に取りだされたるひよんの笛

# 太白星

柳生千枝子

虫干の母の手紙は捨てずおく  
七月の鉄路葛原風の音  
炎昼のわが手の翳の他あらぬ  
脳毀れゆく夢に醒め白木槿  
給餌器の宙に蜂鳥来ては去る  
蝸や頸傾けて便り書く  
水捨てて灼け土の香を揺りおこす

杉浦典子

七夕の風の木橋を渡りけり  
水出でしみづかき昏き夏の鴨

海の日のロープウエーに海を見て  
夏草の丈の深さを水 flowing  
切り出しし石に雨降る花ユツカ  
庭下駄のかたき鼻緒の涼しかり  
夏鶯山の隣に住み古りし

浜口高子

奥の院へ磴のつつ立つかき氷  
とんがらしの葉を炒めぬる梅雨の月  
ひもろぎの没日に現れし浮巢かな  
鉾立や藁屑美しく舞ひ上がり  
鉾番に珈琲の香のただよへる  
露座仏の陰を出でざり蟻の列  
夕顔の風ともならず誰か来る

# 火星作品

## 山尾玉藻選

母病める夕べ玉葱やはく煮て  
大和郡山城 孝子

茹でられし蛸のまんまる宵祭

双塔のひとつに見ゆる夏の鴨

起きぬけの父が蟬の木ゆらしけり

川音に帚木太りぬる帰省  
八幡坂口夫佐子

ががんに磨きあげたる寺の廊

杉本家の土間に据ゑたる花水

南天の花屑まみれ大蚯蚓

カレンダーに誰が掛けしか灸花

帰省子のひたすら眠る足裏かな  
伊丹渡邊美保

谿流へ落ちし夕日の山かがし

玉砂利を夏蝶の影もどり来し

片蔭に入り足踏みすチンドン屋

干梅の香り平らに展がりぬ  
 空蟬の老いのかたち日の名残り  
 目覚めては身のうち軋む籐寝椅子  
 山車の縁笛の男の居敷よし  
 脚動く落蟬をさてどこに置こ  
 凌霄の昏きへ蟻のとぎれ無し  
 さつきとは違ふ滝音足ふんばる  
 置きかへて沖の展けし水中花  
 押入れに顔突つ込めば青葉木菟  
 夏椿百の仏に百咲けり  
 墓石の涼しき人でありにけり  
 宵宮や暗きところを水流れ  
 赤松のあひ七月の雲湧けり  
 羅の加茂の神宮透けみたり  
 坪庭に日の残りぬし宵飾  
 生酔ひや祇園囃子のきりもなし  
 いっつぞやの蟻螂山の鉾粽  
 宝塚山本耀子  
 明石戸栗末廣  
 神戸深澤鱧

# 選のあとに

山尾 玉藻

茹でられし蛸のまんまる宵祭

城 孝子

祭料理のために蛸が一匹まるごと茹で上げられたのだろう。真っ赤に丸まった蛸の形がなんとも喜ばしい。「まんまる」の弾みのある表現に祭を迎える喜びが籠められている。同時発表作「双塔のひとつに見ゆる夏の鴨」、薬師寺の西にある大池の端に立つと遙かな薬師寺の双塔が見事に重なって見える。「夏の鴨」の添景がいかにも静寂で、影絵の如き一句である。

南天の花屑まみれ大蚯蚓

坂口夫佐子

よく太った蚯蚓が波打つように動いているのは余り快いものではない。しかしこの蚯蚓、南天の根元にたまたま這い出て来て、零れ落ちた南天の白い花まみれになつてうごめいている。捉えどころにウィットに富んだ面白さがある。へ帰省子のひたすら眠る足裏かな、故郷に戻ってきた安堵の足裏のなんと無防備で微笑ましいことか。

谿流へ落ちし夕日の山かがし

渡邊 美保

山棟蛇は水辺で蛙などを捕食して生息する毒蛇で、体の側面に紅の斑点がある。その蛇が夕日に染まればよいよ怪し

く、一層ぬらぬら感を増していたことだろう。今、その蛇が夕焼いろに発光しつつ谿流へ落下していった。暫く、その鮮烈な残像が作者の眼裏から消えなかつたことだろう。へ空蟬の老いのかたちに日の名残り、丸まった抜け殻を「老いのかたち」とは、よくぞ言つてのけた。その気分の高揚を「日の名残り」で抑えて哀れが漂う。

目覚めては身のうち軋む藤寝椅子

山本 耀子

実際に軋んだのは藤寝椅子の方であろう。しかし、眠りから覚めた直後の頼りない脳裏には、まるでわが身から発した軋み音のようにひびいたのである。寝莫座や布団の上で目覚めたならばこの感覚は生じず、「身のうち軋む」はいかにも藤寝椅子らしい感受である。へ凌霄の昏きへ蟻のとぎれ無しは、なにやら不安感がこころに刻みつけられる景。「凌霄の昏きへ」の陰翳の所以であろう。

置きかへて沖の展けし水中花

戸栗 末廣

海の見える窓辺に置かれていた「水中花」が少し脇へ寄せられた途端、作者の眼に沖の水平線が晴れ晴れと広がって映つたのだろう。「水中花」のくどくどしい色が急にくすぶつたかのようでもある。(以下略)



同人 I

# 恒星圈

白数康弘

山門は茅葺きなりし萩の風  
萩むらのありてこれより径細る  
やはらかき口のありてこそ乱れ萩  
揺れてゐる影の揺れゐる括り萩  
白萩のもつれもつれてをりしかな

坂口夫佐子

大東由美子

締切り近し蓮の葉のあふらるる  
うながされカメラ飲み込む朝ぐもり  
飛行船ビニールプールは水満てる  
佇めば蒲の風立つ神の池  
縁側で足の爪切るすいつちよん

涼風の過ぐるステンドグラスかな  
七月の波音を聞く横座かな  
夏帽子くらげの海を覗きゐる  
深吉野の水に現れたる山かがし  
片かげりまなこ上げてはスケッチす

城孝子

高尾豊子

星まつり本家の嫁が来てゐたり  
海の日やとびきり辛きカレー煮て  
般若経朝のくも囲を抜け来たる  
水打つて蟬声かはる西の京  
波音に蘇鉄太れる日の盛

法要の足のしびれやソーダ水  
戦ひは雨の中にて水鉄砲  
斜交ひの扇やシャネル19番  
四駆より降り夏霧の琵琶湖かな  
合飲の花空の深さを眠りけり

# 獅子座

山尾玉藻推薦

根本ひろ子

権禰宜の声にががんぼ揺らぎけり  
睡蓮の水飲んでゐる猫の舌  
滴りの時にはげしき高野道  
夏山の天涯近き雑魚寝かな

井上淳子

山建てて打ち水低く打ちにけり  
灯の入りて男いよいよ祭貌  
大丸を抜けきし長刀鉾の前  
うつぎ咲く土手をそびらに鮎釣師

涼野海音

背の高き男の覗く泉かな  
ととととと鴉の歩く野分晴  
ひげ剃つてどこへも行かず羽抜鶏  
節電と書かれし団扇拾ひけり

笠置早苗

夏深し車窓に迫る男山  
笹むらに蛇落ちし音なりし  
のうぜんのどこか異国の吹かれやう  
峰雲へ螭螂鉾の首廻す

藤田素子

夾竹桃暮るる気配のなきフェンス  
炎屋や寝場所を移る犬の背  
蟬鳴いて野菜ジュースの深みどり  
シニヨンのつんと上向く巴里祭

田中文治

携帯のシャッタ i 音や雲の峰  
竹落葉はりつく午の水面かな  
ひぐらしや鎌を片手に山下る  
一つこぼれし山門の実梅籠

川端俊雄

鑑真の着きたる浜の大花火  
洗はれてゐる象の背に虹立てり  
酒蔵の影の濃くある晩夏かな  
炎天の瓦礫に向かひ合掌す